

家族の中の高齢者 (1)

— 高齢者の家族観について —

猪野郁子*・周藤紀子**

Ikuko Ino and Noriko SUTOU

The Older Generation as a Member of the Family -The Older Generation
Take a View of the Family and the Family System

〔Key Word : 家族・高齢者・「家」の連続性・家族の凝集性・老親扶養・家族の不平等性〕

1 はじめに

家族は近年大きく変化した。一つには、家族の構成人数である。1965年以降に4人を切ったからは減少傾向をたどり1992年には3.04人にまでなっている¹⁾。このことは3世代同居世帯よりも夫婦と子どもあるいは単親と子どもの核家族世帯と単身（単独）世帯が増加したことと関連している。二つには、家族構成員の結びつきが希薄になったことである。社会全体が人と人との結びつきを希薄にしているが、家族においても例外ではなく個々バラバラに生活を営んでいる。小此木啓吾²⁾はこうした現象を「ホテル家族」と称し、時には「私たちは家族よ」と確かめ合うdoingが必要になってきていると述べている。また、夫婦の結びつきも、基盤とする「愛」がなくなれば解消に向かうのはもちろん、些細な障害でも壊れ易くなっている。このため、離婚率は結婚率の減少と対照的に増加しているのが現状である。三つ目は、人々の価値観や生活スタイルの多様化である。夫婦別姓、非嫡出子への財産相続、結婚という形態をとらない共同生活（同棲・共棲）等々さまざまな家族に関わる現象の普遍化とともに生殖家族を作ること否定する若者も急増している。これらのことは、出生率の低下（少子化）と高齢者の介護看護の上に大きな問題を投げかけていることも事実である。

また、新民法が制定されて約50年、われわれの意識の中から完全に「家」意識がなくなったかといえ、必ずしもそうとは言い切れない。まだまだ「家」のしがらみに縛られている人は多い。そのことが結婚をむずかしくし、結婚を望みながら結婚出来ない状況を生み出している。そして、高齢者もまた教え込まれた儒教思想と目まぐるしく変化した現状との狭間で「なるようにしかならない」心境で日々生活しているのが実状である。

島根県は全国一の高齢県であり、また全国平均に比べて複合家族（拡大家族）が高い割合で存在する³⁾。これには、流出はあっても流入が少ない島根県では意識の変革が緩やかになされていることが関係しているのであろう。しかし、世の中の流れは早い。このままでは世代間の意識のギャップが大きくなる危険性が考えられ、せっかく同居していてもそれは物理的に同じ屋根の下に生活していると言うに過ぎなくなろう。島根県の高齢者、中でも子ども家族と同居の高齢者に自殺者がみられることは、このことを物語ってしよう。

情報網の発達で知識として時代を認識していても、それが意識としてどの程度浸透しているのであろうか。つまり、高齢者が日常生活や学校教育で培われた「家」意識や家族制度についての意識はどの程度残っているのか。住む地域や年齢、性別、家族構成によって違いがみられるのであろうか。

出生数が死亡数を下回るという自然減の事態の中で若い世代と高齢者の世代が共存して行くためには、さまざまな事象に対する意識の共有が必要になろう。また、住宅事情や高齢者介護の上から、今後3～4世代の同居の必要性が高まるのではないかと考える。

その際、お互いを理解しながら家庭を経営して行くために、どのような意識が基盤にあるか知っておく必要があると考える。

こうした問題意識から今回は高齢者の「家」意識や家族観に焦点を当てて調査を実施したので報告する。

2 調査方法と対象

質問紙法を用いた。質問紙は、中塚の「老人の家族観と居住形態との関連について」⁴⁾で使用された質問項目

* 島根大学教育学部家政研究室
** 島根県立出雲農林高等学校

34に親族との関係や財産に関する3項目を加えた37項目からなっている。中塚の34項目は、家族(特に世代間)の凝集性、権威的家族関係、「家」の継承性および老親の扶養についての意識を問うものである。これら37項目について「はい」「いいえ」「どちらでもない」の三者択一で回答を求め、「はい」は3点、「いいえ」は1点、「どちらでもない」は2点で得点化し平均と標準偏差を算出し統計処理を行った。

調査は、出雲部(出雲市、平田市、大社町)200人、石見部(益田市、浜田市、江津市)230人を対象になされた。調査用紙は、各市町の社会福祉協議会および老人福祉センターを通じて配布され、回収は個人から直接返送によった。

出雲部と石見部から対象を選出したのは、東西に長い島根県を一つにして考えることは危険と判断したこと。また、東西の歴史のおよび経済基盤上の違いが生活スタイルに表れていると考えたことによっている。今回平野部に集中しているのは、調査の時間的な制約からである。出雲部は165部、石見部は175部の計340部の回収をみた。回収率は79%である。

このうち、質問項目への回答が揃っている310部についての考察を行う。

対象者の内訳を見ると、表1に示すように、60~64歳のいわゆる高齢者に属さない者が全体で72名(23%)含んでいる。そこで、ここでは高齢者に60代前半者も含めて考察を行う。年齢の最高は94歳である。T町を除いて女性が半数強占めている。家族構成は、出雲部は既婚の子ども家族と同居している高齢者が半数強であるのに対し石見部は夫婦のみあるいは独り暮らしの者が多いことが注目される。なお、夫婦のどちらかの親やきょうだいと同居している場合も夫婦のみに入れた。

3 結果および考察

表1 対象者の概要

人数 (%)

	全 体 人 数	年 齢			性 別		家 族 構 成 別				
		60~69歳	70~79歳	80歳~	男性	女性	独り	夫婦のみ	既婚子家族同居	未婚子同居	
東 部	I 市	81	19	41	21	25	55	14	17	39	7
	H i 市	29	9	12	8	12	17	0	7	16	5
	T 市	43	5	30	8	32	11	3	15	25	0
	小計	153(100)	33(22)	83(54)	37(24)	69(45)	83(54)	17(11)	39(25)	80(52)	12(8)
西 部	M 市	51	21	21	9	24	27	13	19	15	3
	H a 市	42	14	21	6	14	28	9	14	11	1
	G 市	64	4	45	13	30	32	13	29	18	2
	小計	157(100)	39(25)	87(55)	28(18)	68(43)	87(55)	35(22)	62(39)	44(28)	6(4)
計	310(100)	72(23)	170(55)	65(21)	137(44)	170(55)	52(17)	101(33)	124(40)	18(6)	

注：年齢、性別、家族構成での不明者を除く。

1) 高齢者の家意識

37項目を得点の高い順に並べて上位5位と下位5位に入る項目を取り出したものが表2である。

最高得点を示した項目は、「物事の決断はみんなで話し合うべき」で、ついで「共働き家庭では夫も家事を分担すべき」となっている。また、最低点を取った項目は「家事は男性は分担しなくともよい」、次が「既婚の女性は職業を持たず家事を行うべき」である。このように上位下位の各項目は、家庭の中の民主主義と男性の家事参加や介護が支持されるなど伝統的な性別役割分業に批判的な結果となっている。「たてまえ」上は、古い意識はなくなっていると判断できよう。

これら10項目の内、東西間で地域差の見られた項目は、上位1位の「物事決断するときみんなで話し合う」と下位3位の「年老いた親が既婚の子どもと暮らすとうまくいかない」の2項目で、「物事の決断はみんなで」は東部が、「年老いた親」は西部が有意に高い点数であり肯定していた。

年齢間で差異が見られたのは、上位3位の「年老いた親の世話は息子も」と下位3、4、5位の「既婚の子どもと暮らすとうまく行かない」「次三男は長男の意見に従うべき」「子どもの教育は息子に期待を」の4項目で60代より80代以上の者が有意に支持していた。「高齢者の世話を息子も」や「既婚の子どもと暮らすとうまくいかない」が80代により支持されているということは、経験から出ているとも推測できる。60代で子ども家族と同居している割合は46%に対し、80代は63%と高い割合であるからである。

項目によっては、地域差や年齢差はみられるが上位と下位5項目を見る限り3世代同居や性別役割にこだわっていないといえよう。

2) 因子分析

37項目がどの様な因子に分解できるか因子分析を行っ

表2 得点の上位下位各5項目 ($\bar{X} \pm S. D.$)

項 目	得点	地 域		年 齢		
		東 部	西 部	60代	70代	80代
物事を決めるのはみんな	2.96	2.98 \pm 0.11	2.93 \pm 0.29*	2.95 \pm 0.20	2.96 \pm 0.21	2.96 \pm 0.24
共働きの家庭では夫も家事分担を	2.90	2.89 \pm 0.36	2.90 \pm 0.35	2.94 \pm 0.23	2.90 \pm 0.65	2.86 \pm 0.46
年老いた親の身の回りの世話は息子も	2.80	2.77 \pm 0.54	2.82 \pm 0.46	2.73 \pm 0.58	2.78 \pm 0.51	2.90 \pm 0.34
年老いた親は家庭の中で尊敬される	2.77	2.80 \pm 0.46	2.75 \pm 0.48	2.77 \pm 0.53	2.75 \pm 0.46	2.81 \pm 0.42
姑は娘や嫁に生活の知恵を教えるべき	2.74	2.73 \pm 0.56	2.75 \pm 0.56	2.73 \pm 0.60	2.75 \pm 0.55	2.73 \pm 0.53
親は息子の教育に期待をかけるべき	1.97	2.01 \pm 0.75	1.94 \pm 0.79	1.79 \pm 0.73	1.98 \pm 0.78	2.16 \pm 0.76
次男三男は、長男の意見に従うべき	1.84	1.88 \pm 0.76	1.80 \pm 0.76	1.68 \pm 0.78	1.85 \pm 0.75	1.98 \pm 0.73
年老いた親は子ども家族と暮らすとうまく行かない	1.80	1.88 \pm 0.90	2.17 \pm 0.82**	1.76 \pm 0.89	2.05 \pm 0.86	2.24 \pm 0.83
既婚の女性は仕事をもち家事をすべき	1.72	1.69 \pm 0.73	1.75 \pm 0.78	1.65 \pm 0.77	1.68 \pm 0.74	1.89 \pm 0.79
家事は男性は分担しなくともよい	1.47	1.49 \pm 0.73	1.46 \pm 0.73	1.37 \pm 0.72	1.46 \pm 0.68	1.63 \pm 0.85

た。固有値1.0以上の因子は12抽出されたが、累積寄与率が30%以上になるよう4因子にまとめたものが表3である。

4因子に分類すると、3項目がいずれにも属さないことが判明し、また、中塚が奈良大阪を対象としたときの4因子に属する項目と相違がみられた。

そこで、各因子に属する項目から第1因子は「家」の連続性意識、第2因子は家族の凝集性意識、第3因子は老親扶養意識、第4因子は家族の不平等性意識と命名した。ここでは、各因子に含まれる項目の平均点と標準偏差を用いて項目毎の分析を行う。t検定を用いた。

a) 第一因子 「家」の連続性

この因子の中には、「家」の継承と長男子を重んじる家父長制の二面が含まれている。つまり、川島⁶⁾のいう「家的家父長制」である。第一因子に含まれる項目の地域・性別・年齢・家族構成別の得点をまとめたものが表4である。

第一因子に含まれる12項目中「婿養子や養子を迎えてでも家を継がせる」「親の生活を長男がみる」という項目で東西間に有意に違いがみられ、東部によりこの傾向が強い。性別では差異はみられない。年齢別では、「婿養子」や「養子を迎えてでも家を継がせる」や「成人した子どもは親の世話を」の3項目で80代以上が、「子どもに家風を伝える」と「家長の意見を尊重」の2項目では70代が最も高い得点を示し、これら5項目は60代との間に有意な差異がみられる。一般的にこの因子では年齢の高い層が肯定の傾向にあるといえる。

1986年全国共済農業組合連合会による農村婦人の生活意識調査⁶⁾をみると、同居している姑世代(50,60代)

の61%が養子をもってでも「家」を継がせたいとしているのに対し、嫁世代(20,30代)の54%は「家」は途絶えてもかまわないとしている。このように、「家」の存続意識は年齢によって明らかに異なるようである。

家族構成別では、「婿養子を迎える」「両親の生活を長男がみる」「老後は子や孫と」の項目にみられるように、どちらかといえば「家」の継承に関わる項目は子ども家族と同居している高齢者に支持されている。

この因子に含まれる13項目の平均点と標準偏差を各要因別に算出しt検定を行ったところ、地域、年齢および家族構成(子ども家族と同居か否か)で差異がみられた。この因子には、地域、年齢および家族構成が強く関連しているといえよう。

b) 第二因子 家族の凝集性

家族の凝集性を表す項目は、7項目であった。表5にみられるように、地域差の見られる項目はなかった。男女間ではどちらかといえば男性の方が高い得点を示しているが、有意な差異が見られたのは「高齢者は家族のまとめ役」のみであった。また、この項目は80代より60代が有意に望んでいる。年代別では、親(高齢者)の意見を聞くことを60代が、高齢者への援助については80代がより強く望んでいる傾向がみられる。家族構成別には、金銭的な援助で夫婦のみの所帯より独り住まいの高齢者が有意に高く要求している以外は明確な違いはみられない。

この因子では、2~3の項目で性別・年齢別で差異はみられたが、全般的には同じ傾向にあるといえこの因子を規定する要因は本調査ではみつからない。

表3 高齢者の家意識の因子構造

質 問 項 目		因 子 負 荷 量				
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	
第一因子 「家」の連続性意識	娘ばかりの場合、婿養子を迎えて家を継ぐべきか	0.616	0.071	-0.056	0.141	
	子どもがいない場合、養子をもって家を継がせるべきか	0.561	0.060	0.001	-0.031	
	両親の生活は主として長男がみるべきか	0.521	0.007	-0.160	0.211	
	分家は何かにつけて本家を立てていくべきか	0.513	0.136	-0.119	0.279	
	親は子どもに家の家風を伝えていくべきか	0.500	0.281	-0.052	-0.002	
	家庭内の重要なことを決めるとき、妻は夫の意見に従うべきか	0.488	0.106	0.016	0.454	
	結婚は本人同士の愛情だけでなく、親の意向も聞くべきか	0.464	0.198	0.054	-0.234	
	老後は、子どもや孫と一緒に暮した方がよいか	0.459	0.081	-0.370	-0.208	
	子どもが家を継ぐとき、故郷を離れない方がよいか	0.432	-0.238	-0.010	0.034	
	家族成員は家長の意見を尊重すべきか	0.401	0.353	-0.080	0.107	
第二因子 凝集性の意識	孫の養育に関して、子ども夫婦は年老いた親の助言を聞くべきか	0.098	0.592	-0.016	0.007	
	高齢者は家庭の中では、相談役やまとめ役になるとよいか	-0.020	0.587	0.128	0.022	
	姑は、娘や嫁に生活の知恵を教えるべきか	0.170	0.574	-0.021	-0.064	
	年老いた親の身の回りの世話は、娘や嫁だけでなく息子も行うべきか	0.136	0.498	0.030	-0.186	
	年老いた親は、家庭の中で尊敬されるべきか	0.054	0.470	-0.092	-0.024	
	年老いた親に、子どもは金銭的な援助を行うべきか	0.194	0.379	0.006	0.133	
	嫁は、家庭のことに関して姑のやり方に従うべきか	0.221	0.337	-0.085	0.302	
	第三因子 老親の扶養意識	年老いた夫婦と子ども夫婦は互いの生活を大切にするため別居する方がよいか	-0.156	0.015	0.701	-0.048
		年老いた親は、結婚した子どもと暮らすとうまく行かないか	-0.006	-0.068	0.665	0.062
		身の回りのことが不自由になった高齢者は、老人ホームに入る方がよいか	0.118	-0.091	0.650	-0.215
老後は家族に頼らず自立した生活をおくるべきか		-0.212	-0.016	0.502	0.121	
仕事を持つ嫁は、親の介護を公的サービスにまかせた方がよいか		0.059	0.020	0.486	-0.314	
年老いた親にとっては、子どもからの援助より公的サービスの方が気が楽か		0.166	-0.360	0.437	0.009	
長男だけ親の財産を相続するより、子どもたちに平等に分ける方がよいか	-0.149	0.165	0.383	0.034		
第四因子 家族の不平等性意識	家庭内の家事は、女性の役割であり男性は分担しなくてもよいか	-0.085	-0.107	0.018	0.621	
	共働きの家庭では、夫は家事を幾らか分担すべきか	0.132	0.142	0.171	-0.519	
	先祖代々の財産は、どんなことがあっても手放すべきではないか	0.244	0.046	0.016	0.483	
	結婚した女性は、職業を持たず家庭で家事をしっかりと行うべきか	0.139	0.144	0.118	0.458	
	親は子どもの教育を行うとき、娘より息子に期待をかけるべきか	0.297	-0.027	0.222	0.415	
	寝たきりになった高齢者は、家族が介護すべきか	0.225	0.311	-0.215	0.398	
きょうだい間では、次男や三男は、長男の意見に従うべきか	0.392	0.183	-0.114	0.394		
	冠婚葬祭等のまつりごとを行う場合、親族の意見を聞くべきか	0.247	0.166	-0.016	-0.034	
	結婚は、愛情があれば身分や家柄は関係ないか	-0.033	-0.088	0.086	0.022	
	家庭において、独りで物事を決めるのではなく、みんなで話し合っ決めてべきか	0.048	0.097	0.006	-0.197	

表4 第一因子に含まれる項目の地域・性別・年齢・家族構成別得点 ($\bar{X} \pm S, D$)

第一因子「家」の連続性意識	地 域		性 別		年 齢			家 族 構 成		
	東 部	西 部	男	女	60 代	70 代	80 ~	独 り	夫婦のみ	子ども家族 と同居
娘ばかりの場合、婿養子を迎えて家を継がせるべき	2.52±0.63	2.17±0.76	2.40±0.74	2.29±0.71	2.15±0.83	2.40±0.66	2.46±0.70	2.33±0.64	2.20±0.78	2.47±0.70
	***				**					**
子どもいない場合、養子を迎えて家を継がせるべき	2.44±0.67	2.15±0.78	2.38±0.77	2.22±0.71	2.16±0.78	2.29±0.73	2.47±0.70	2.19±0.71	2.25±0.77	2.38±0.74
	***				*					
両親の生活は主として長男がみるべき	2.35±0.77	2.15±0.81	2.27±0.80	2.22±0.79	2.16±0.82	2.21±0.79	2.41±0.76	1.98±0.77	2.15±0.79	2.43±0.76
	*									**
分家は本家を立てていくべき	2.39±0.78	2.07±0.84	2.19±0.84	2.25±0.80	2.15±0.89	2.22±0.79	2.32±0.83	2.01±0.82	2.15±0.82	2.35±0.80
	***									***
親は子どもに家風を伝えていくべき	2.52±0.69	2.56±0.68	2.51±0.71	2.56±0.67	2.38±0.83	2.62±0.60	2.50±0.71	2.42±0.72	2.50±0.73	2.59±0.64
					*					
妻は夫の意見に従うべき	2.36±0.77	2.21±0.80	2.13±0.84	2.40±0.73	2.15±0.81	2.27±0.79	2.49±0.73	2.23±0.78	2.13±0.87	2.43±0.72
			**		*					**
結婚は、親の意向も聞くべき	2.68±0.63	2.57±0.70	2.56±0.73	2.68±0.61	2.52±0.80	2.64±0.64	2.72±0.57	2.67±0.64	2.59±0.70	2.68±0.63
老後は子や孫と暮らした方がよい	2.73±0.58	2.65±0.59	2.66±0.63	2.71±0.55	2.72±0.56	2.67±0.60	2.73±0.59	2.67±0.55	2.50±0.69	2.83±0.47

家を継ぐ子は故郷を離れない方がよい	2.52±0.71	2.52±0.72	2.43±0.77	2.59±0.66	2.55±0.69	2.47±0.75	2.64±0.64	2.61±0.59	2.43±0.78	2.57±0.70
										*
家族成員は家長の意見を尊重すべき	2.64±0.61	2.57±0.68	2.51±0.72	2.67±0.57	2.44±0.78	2.67±0.57	2.60±0.65	2.57±0.63	2.51±0.73	2.66±0.59
					*					
親の仕事は、長男に継がすべき	2.15±0.80	2.12±0.79	2.17±0.82	2.11±0.78	2.12±0.82	2.08±0.79	2.27±0.82	2.12±0.77	2.04±0.82	2.17±0.80
成人した子どもは親の世話をすべき	2.69±0.59	2.60±0.56	2.60±0.62	2.68±0.54	2.59±0.62	2.60±0.61	2.83±0.37	2.63±0.59	2.60±0.58	2.70±0.58
					**					
子どもは年老いた親の意見に従うべき	2.09±0.72	2.01±0.69	2.05±0.72	2.04±0.69	1.95±0.74	2.05±0.68	2.13±0.72	1.98±0.72	2.00±0.68	2.10±0.72
					**					
平 均	2.47±0.72	2.34±0.76	2.37±0.77	2.42±0.72	2.31±0.80	2.40±0.73	2.51±0.71	2.33±0.73	2.31±0.78	2.49±0.71
	**				**					***
					**					***

猪野節子・周藤紀子

表5 第二因子に含まれる項目の地域・性別・年齢・家族構成別得点 ($\bar{X} \pm S, D$)

第二因子 家族の凝集性意識	地 域		性 別		年 齢			家 族 構 成		
	東 部	西 部	男	女	60 代	70 代	80 ~	独 り	夫婦のみ	子ども家族 と同居
子どもの養育について老親の意見を聞く	2.33±0.80	2.36±0.80	2.40±0.78	2.30±0.82	2.47±0.80	2.32±0.79	2.27±0.82	2.36±0.81	2.42±0.80	2.30±0.80
高齢者は家族の相談役やまとめ役になるとよい	2.49±0.71	2.59±0.65	2.64±0.62	2.46±0.72	2.63±0.67	2.55±0.67	2.40±0.70	2.51±0.64	2.61±0.65	2.51±0.72
姑は嫁に生活の知恵を教えるべき	2.73±0.56	2.75±0.56	2.81±0.50	2.68±0.59	2.73±0.60	2.75±0.55	2.73±0.53	2.86±0.34	2.72±0.61	2.72±0.57
老親の世話は、息子も行うべき	2.77±0.54	2.82±0.46	2.83±0.44	2.77±0.54	2.73±0.58	2.78±0.51	2.90±0.34	2.84±0.45	2.81±0.45	2.79±0.52
老親は、家庭の中で尊重されるべき	2.80±0.46	2.75±0.48	2.78±0.50	2.76±0.45	2.77±0.53	2.75±0.46	2.81±0.42	2.78±0.45	2.74±0.52	2.78±0.46
子どもは老親に金銭的な援助を行うべき	2.21±0.75	2.19±0.76	2.15±0.75	2.23±0.75	2.12±0.78	2.18±0.74	2.33±0.75	2.36±0.76	2.02±0.74	2.26±0.74
嫁は家庭に関して姑のやり方に従うべき	2.09±0.70	1.98±0.73	2.00±0.75	2.05±0.69	1.86±0.75	2.13±0.70	1.98±0.69	2.07±0.73	1.99±0.74	2.03±0.69
平 均	2.49±0.70	2.49±0.71	2.52±0.70	2.47±0.71	2.47±0.75	2.50±0.69	2.49±0.70	2.54±0.68	2.47±0.73	2.48±0.70

表6 第三因子に含まれる項目の地域・性別・年齢・家族構成別得点 ($\bar{X} \pm S, D$)

第三因子 老親扶養意識	地 域		性 別		年 齢			家 族 構 成		
	東 部	西 部	男	女	60 代	70 代	80 ~	独 り	夫婦のみ	子ども家族 と同居
老親と子ども家族は別居する方がよい	2.11±0.88	2.58±0.72	2.35±0.85	2.36±0.83	2.20±0.88	2.39±0.83	2.43±0.80	2.65±0.65	2.62±0.71	2.06±0.89
結婚した子どもと暮らすとうまく行かない	1.88±0.90	2.17±0.82	1.99±0.87	2.05±0.87	1.76±0.89	2.05±0.86	2.24±0.83	2.13±0.84	2.26±0.81	1.83±0.89
身の回り不自由になった高齢者は老人ホームへ入る方がよい	1.94±0.84	2.02±0.83	2.05±0.84	1.94±0.83	1.98±0.88	2.02±0.83	1.89±0.83	2.01±0.80	2.10±0.86	1.88±0.82
老後は家族に頼らず自立した生活をおくるべきか	2.17±0.83	2.47±0.76	2.35±0.81	2.31±0.81	2.44±0.76	2.28±0.82	2.32±0.83	2.40±0.77	2.44±0.77	2.24±0.85
仕事もつ嫁は親の介護は公的サービスに任せた方がよいか	2.03±0.78	2.12±0.79	2.13±0.82	2.03±0.76	2.06±0.77	2.08±0.79	2.07±0.81	2.15±0.77	2.29±0.77	1.90±0.77
子どもの援助より公的サービスが気が楽	2.20±0.84	2.33±0.83	2.25±0.84	2.29±0.84	2.08±0.88	2.27±0.84	2.47±0.73	2.28±0.87	2.20±0.87	2.30±0.81
親の財産、子どもに公平に分ける方がよい	2.20±0.87	2.33±0.82	2.36±0.84	2.20±0.85	2.05±0.93	2.36±0.80	2.27±0.87	2.53±0.77	2.33±0.86	2.12±0.86
平 均	2.08±0.86	2.29±0.82	2.21±0.85	2.17±0.84	2.08±0.87	2.21±0.83	2.24±0.83	2.31±0.81	2.32±0.82	2.05±0.86

表7 第四因子に含まれる項目の地域・性別・年齢・家族構成別得点 ($\bar{X} \pm S, D$)

第四因子 家族の不平等意識	地域		性別		年齢			家族構成	
	東部	西部	男	女	60代	70代	80代	独り暮らし	子ども家族と同居
家庭内の仕事は女性の役割である	1.49±0.73	1.46±0.73	1.45±0.73	1.50±0.74	1.37±0.72	1.46±0.68	1.63±0.85	1.44±0.72	1.58±0.79**
共働き家庭 夫も家事分担すべき	2.89±0.36	2.90±0.35	2.94±0.29	2.87±0.39	2.94±0.23	2.90±0.35	2.86±0.46	2.94±0.30	2.90±0.39
先祖代々の財産は手放すべきでない	2.13±0.80	2.00±0.85	2.02±0.84	2.11±0.83	1.90±0.87	2.05±0.83	2.27±0.78**	2.09±0.86	2.08±0.81
結婚した女性は職業を持たず、家事を行うべき	1.69±0.73	1.75±0.78	1.64±0.72	1.79±0.78	1.65±0.77	1.68±0.74	1.89±0.79	1.75±0.81	1.76±0.75
子どもの教育 娘より息子に期待をかけるべき	2.01±0.75	1.94±0.79	1.91±0.80	2.02±0.74	1.79±0.73	1.98±0.78	2.16±0.76**	1.88±0.78	2.02±0.78
寝たきりになった高齢者家族が介護	2.47±0.67	2.38±0.71	2.41±0.73	2.42±0.66	2.38±0.76	2.44±0.67	2.47±0.66	2.28±0.69	2.48±0.65
きょうだいは長男に従うべき	1.88±0.76	1.80±0.76	1.79±0.76	1.88±0.76	1.68±0.78	1.85±0.75	1.98±0.73*	1.86±0.71	1.89±0.78
平均	1.82±0.81	1.77±0.82	1.75±0.82	1.83±0.81*	1.68±0.81	1.80±0.81**	1.93±0.83**	1.76±0.81	2.10±0.83***

c) 第三因子 老親扶養意識

この因子を構成する7項目の得点を表6に示す。性別では違いはみられないが、東西間では西部が、年齢では80代が、家族構成では独りや夫婦で暮らしている者がどちらかといえば子どもから自立した生活や公的サービスに期待する項目を支持していることである。

60代の対象者で子ども家族と同居している割合は46%、80代は63%である。東部の子ども家族との同居率52%、西部は28%である。この子ども家族との同居ということがこの因子の結果を決定しているようである。つまり、自立や公的サービスを支持する西部の高齢者には、東部に比べて子ども家族と同居している者の割合が少ない。同居したくとも同居できない現実から必然的に導かれた結果であろう。また、高齢になるほど同居率は高くなるが、同居によるさまざまな思いが、同居できないことによって自立へ向かわせたのとは逆に、自立や公的サービスに向かわせていることにも注目する必要がある。

d) 第四因子 家族の不平等意識

この因子には、固定的な性別役割分業意識と娘より息子、次三男より長男という第一因子にも見られた家父長制が含まれる。結果は表7である。この因子に含まれる7項目は地域・性別・家族構成間にほとんど差異はみられない。年齢別で80代が60代に比べて財産管理と長男重視の傾向が強くみられる。

この因子に含まれる個々の項目については、性差はみられなかったが、7項目の平均点では、80歳以上の、女性の、子ども家族と同居の高齢者が他の高齢者に比べて有意に支持しており、このような高齢者に家族の不平等や性別役割意識が根強く残っていることを表している。

4 要約

高齢者が「家」や家族についてどのような意識をもっているかをみるために、島根県の東部の3市町と西部の3市の60歳以上の高齢者を対象に質問紙調査を実施したところ、次のような結果が得られた。

- 1) 上位下位各々5項目は、子ども家族との同居や固定的な性別役割観に否定的な項目であった。
- 2) 因子分析を行ったところ、寄与率30%以上で4つの因子に分解できた。
- 3) 第一因子「家」の連続性意識に属する項目は、13項目であった。この中には、「家」の継承と長男子を重んじる家父長性が含まれる。

4)第一因子は、東部の、年齢の高い層と子ども家族と同居している高齢者に支持されている。

5)第二因子家族の凝集性に属する項目は7項目であった。この因子に含まれる項目は、地域・性別・年齢・家族構成による違いはみられなかった。

6)第三因子は老親扶養意識を示す7項目からなっている。西部の、80歳以上の、独りや夫婦のみの高齢者に支持されている。

7)第四因子家族の不平等性は、性別役割分業や長男子を重んじる家父長制を含む7項目からなっている。女性の、子ども家族と同居している高齢者により支持されている。

8)家や家族に対する意識には、高齢者がどのような家族構成で生活しているかが大きく影響しているといえる。

以上である。

家や家族意識は、女性より男性、都市より農山漁村、若い層より高齢者に強く残っているといわれている⁷⁾。

本調査では、性差は家族の不平等性意識にみられたのみで男性が強いという印象は受けなかったが、年齢が高い程また農業の基盤の強い地域ほど残っていることが明らかになった。

島根県の中でも、古いしきたりが強く残っているといわれる出雲部の2市1町は、また島根県内でも有数の農産物産出地域であり、農業だけで生計が立てられる地域でもあることを考えるとわずげよう。

もちろん、同居している若い世代への心配り―「家族の中の話し合い」や「女性の自立志向」への配慮―を忘れてはいないが、根には強い家意識を感じる。

では、西部の高齢者はどうかと言えば、やはり心の底に家を継承して行きたいという強い思いがくみ取れる。しかし、若い世代がここでは生活していけないという現実、子ども世代が他県で生活し同居できない(と言うことは、高齢者は生まれ育った古里から離れられない)現実から、諦めや悟りの境地にいたることが見て取れる。

高齢者の一番の悩みは、「寝たきり」や「痴呆」になった時誰が介護してくれるのか、死後誰がまつってくれるのか、ではなかろうか。同居希望の理由に病気の時の介護希望が最も多いという⁸⁾。死後への不安等は調査結果には表れないものであろうが、高齢者自身が実行しているさまざまな先祖を祭る儀式を自分の死後誰がしてくれるのか(日常的に、自分を誰が祭ってくれるのか)、誰もする人がいないということは忘れ去られるばかりではないのではなかろうか、という不安。実際の葬祭儀礼の実修度は低下しているとはいえないようであるが⁹⁾、日

常子どもや孫世代とともに祭っている同居の高齢者と違い子世代と別居の高齢者の不安は大きいであろう。

若者定住政策がどこまで進められるか、若者がどれだけ定住するか未知数であるが、おそらく島根県の高齢化がそれほど抑えられるとは考えられない。

そうだとするならば、今後、高齢者のこうした家意識を根底に据えて、残った子や孫世代(血がつながっているといまいと)が地域の高齢者とどんな関係を作るのが課題になろう。また、故郷を出ていった子や孫世代が故郷に残った同世代へどのような援助をすべきか(出来るか)を模索しなければならないのではなかろうか。

今回、三者択一の方法を取ったが、質問内容によってはいずれにも答えにくいものがあり、そのことが因子分析にも表れたと考える。今後、項目をさらに検討しより意見を反映させるものとしていく努力が必要と考えている。さらに、各地域の歴史や産業、福祉の状況、人の交流等からの考察が必要であろう。また、これら家や家族意識はどの年齢を境に変わってくるのであろうか。これらを今後の課題としたい。

最後に、調査の労をおとり下さいました各社会福祉協議会、老人福祉センターの職員の皆様および調査にご協力下さいました高齢者の皆様方に謝意を表します。

文 献

- (1) 厚生統計協会：国民衛生の動向，厚生 の指標，第39巻第9号，1992年
- (2) 小此木啓吾：家庭のない家族の時代，ABC出版，1983
- (3) 総務庁統計局：国勢調査報告，1992
- (4) 中塚美直：老人の家族観と居住形態との関連について，家政学研究，76,1992
- (5) 川島武宣：家族及び家族法1，岩波書店，1983
- (6) 有地享：家族は変わったか，ゆうひかく選書，1994
- (7) 同上
- (8) 長谷川浩編：講座家族心理学5，金子書房，1988
- (9) 星野命編：講座家族心理学1，金子書房，1989